
透明

構田 巧

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透明

【Nコード】

N7357Z

【作者名】

構田 巧

【あらすじ】

素直な美咲と素直じゃない誠一。互いに好きあっているのは二人とも分かってはいたけれど、誠一は自分の気持ちを伝えられずにいた。どうしても素直になれない誠一の言葉を一途に待ち続ける美咲だったが、ある日……。二本の平行線の片方がわずかに傾きを大きくした時に起こる、小さなラブストーリー。

(前書き)

お久しぶりです。構田巧です。

前回の投稿からまたもや、長い期間があいてしまいました。

執筆もせずにモンハンやってたんです、はい。ようやくPSPを手に入れたので。

これで俺もハンターだぜと浮かれていたのに、時代はもうPSVI TAだそうですね。

……はは、間違えてなんかいないさ。

作品の話しましょう。

今回は三題噺に挑戦してみました。お題が三つあって、それらを組み合わせた話をつくるというアレです。はじめての経験だったので難しくもありましたが、結構楽しんで書けたと思います。皆さんの暇つぶしになれば幸いです。

お題は「鳥」、「寿司」、「嫌悪感」です。どうぞ。

僕を動物に例えるなら鳥だと思う。

特にカラス。理屈をいっぱいこねそうな所とかいつも本心を隠してそうな所がぴったりだ。腹に一物あるという感じ。僕がそんなイメージを持っているのはやはりカラスが黒いからだろうか。

それに奴らは忘れっぽい。

いや、鳥頭なのはニワトリだったか。でもニワトリが理屈っぽいところはちよつと想像できないので、やはり僕はカラスなのだろう。「誠一、どうしたの？ 変な顔して」

隣でクジャクの檻をながめていた美咲が言う。

「別に。鳥ってあんまり好きじゃないんだ」

「もう、すぐそういうこと言うんだから。せつかくのデートなのに」「デートじゃないだろ。僕たちの間に付き合ってるという事実はないはずだ」

確かに休日の動物園はカップル率が高かった。自分たちもそう見られているのかと思うと、どこかむずがゆい感じがする。が、悪い気がするわけでもなかった。

「それが問題なんだよー。ここまで私がセッティングしてあげたんだから、今日こそちゃんと言葉にしてよね」

私の気持ち、分かっているんでしょ？ と美咲は口をとがらせる。それを横目に見て僕はあさつての方をむく。

パターン化された、日曜恒例のやり取りだった。

「……クジャクって何食ったらあんな色になるのかね」「どうでもいいような話題。」

「んー、虹色の実？」

「どこにあるんだよ、そんなの」

「探せばどこかにあるんじゃないかな」

「あったとしても、そんな理由で虹色になったら人間は肌の色で人

種差別するのをやめるだろうね」

「それって素敵」

「あのなあ……」

「でもやっぱリクジャクは虹の実を食べるんじゃないかなあ」

まさか本気で虹の実とやらを信じているわけでもないだろうが、美咲はどうしてもクジャクに未知の食べ物を食わせたらしい。

「ほら、動物園のフラミンゴが赤いのって赤いエサを食べさせられてるからなんでしょ？」

「まあそうだけど、野生のフラミンゴもちゃんと赤いよ」

「えっ、なんで」

「確かに赤ん坊の時は白いんだけど、フラミンゴが食う藻に赤い色素が含まれてんの」

「そうなんだ」

「それにしても美咲がそういう話を知っているのは意外だな」

「中学の時に誠一が教えてくれたんだよ。忘れちゃった？」

「そうだったかな」

やはり僕は忘れっぽい。

「そうだよ。中国の錬金術の話といっしょに教えてくれた」

「錬金術？」

「んーと、誠一は『中国には昔から、物を食べると食べたものが持っている性質を手に入れることができる』という考え方がある。だから古い皇帝は水銀を飲んで長生きしようとしたんだ。水銀はとても長持ちするからね』って言ってた」

「だから赤いエサを食べたフラミンゴは赤くなるって、僕がそう言ったのか？」

「うん。そう」

「……訂正するよ。フラミンゴと中国の錬金術は無関係」

中学生の僕はアホだったようだ。

僕の顔をのぞきこんで、美咲がイタズラっぽく笑う。

「あれー？ 誠一くん、フラミンゴでも食べたんですかー？」

「うるさい。僕だって間違っの」
「恥ずかしまぎれにそっぱを向く。

僕をひとしきりいじった後、美咲は踊るようにして檻から離れて、
「帰ろっか。もう夕方だし」

高校生の男女が分かれる時間としては妥当なところかもしれない
が、すこし早いと僕は感じた。

動物園を出て五分ほどたち、いつも僕らが別れる駅が見えてきた
頃。

「ねえ、ご飯食べていこうよ」

唐突に美咲がそう切りだした。

「珍しいな。家で食べなくていいの？」

「いいの。今日はちよっと遅くなるって言うてるから」

「そうか。どこ行きたい？」

二人で出かけた帰りに夕食をとるのは初めてのことで、ちよ
つとこだわりたい場面である。

「えーとね、実はもう決まってるんだ」

こっち、と美咲は僕の手を引き歩きだす。

行き先を告げる気はないらしい。

ときどき周りを見渡しながら、それでも美咲は迷いなく進んでい
く。

再び美咲が立ち止ったのはさびれた寿司屋の前だった。

このあたりはよく知っているはずの僕でさえはじめて来る店だ。

頼りないあかりが暖簾のすきまから漏れ出ているものの、本当に営
業中なのか不安になってくる。

「ここ、美味しいの？」

「わかんない。私もはじめて来るから」

「マジかー……」

美咲の横顔とボロきれみたいな暖簾を見比べる。

「別の店にしない？」

「だめ」

即答。

僕はすこしあっけにと取られてしまつた。

「え、なんで」

美咲は蚊のなくような声で、

「……大勢の前で、告白されるのはいやだからです」

「ん？ 何？」

「なんでもない。はやく入ろうよ」

美咲はがらがらと引き戸を開けてひとりで入店してしまつた。僕は開けたままの引き戸から中をのぞいてしばらく迷っていたものの、仕方なく後に続くことにした。

驚くことに、店内は外見よりもみすばらしかった。誰かに『ここ、ホントは三日前につぶれてるんですよ』と言われたら、思わず信じてしまいそうだ。

目つきの悪い中年の板前が一人いるだけで、他の店員は見あたらない。それどころか、僕たち以外に客の姿がなかった。不安である。人生初の回らないお寿司がこんな店だと思つとちよつと残念だ。

ざつと店内を見回すと、店のすみっこの小上がりにちよこんと正座している美咲を見つけた。

歩いていつて向かいに座る。

「なんだかすごい所だなあ」

「うん、なんかかわいいね」

「いや、別にこわくはないけど」

食事をしにきたのに恐怖しなければいけない寿司屋はお化け屋敷を名乗るべきだ。

そのうち板前が注文をとりに来てきたので、僕たちはお品書きから適当に目についたネタを頼んだ。

のそのそとカウンターの奥へと戻っていく後ろ姿はなんだか冬眠

から目覚めたばかりの熊のように見える。

頼んでから寿司が届くまでの時間だけは一級品だった。他に客がないので当然かもしれないけれど。

あつという間にならんだ寿司を前に手を合わせる。

「いただきます」

小皿にしょうゆをとりマグロを一口。

「……んー、普通だ」

「普通だね。可もなく不可もなく」

ネギトロを飲みこんでから、美咲は苦笑した。

「とりあえず不味くなかったことを喜んでおくべきかもしれないな」
「だね」

僕がエビに手をのばしたところで美咲が言った。

「誠一。むかしフラミンゴの話をした時、魚の話もしたのを覚えている?」

「いったん手をとめ記憶をたどるが、やはり何も思い出せはしなかった。」

「覚えてないな、なんだっけ」

「誠一は魚が好きだっけって言った」

「そうだったかな」

「そうだよ、と美咲は笑った。」

「フラミンゴが赤いエサを食べて赤くなるなら、工場排水なんかとどかない遠くの海の水で呼吸して生きる魚はすごく心が透明なんだろうなって言ってた。素直で、思ったことは何でも言えて。私はそれを聞いて、誠一ってロマンチストだなあって思ったよ」

「なんだか気はずかしくなる話だった。」

「ねえ、誠一。魚の心が透明なら、魚を食べれば透明な心になれるんじゃないかな。言ってる意味わかるよね?」

「僕は一部が空になった皿を見た。」

鳥は嫌いだ。特にカラス。だからそろそろ、魚になってもいいか

もしれない。

美咲の気持ちは分かっていた。ずっと前から。

自分の気持ちはそのもつと前からわかっている。ただ、口にはできなかつただけで。

姿勢をただし、深呼吸を二回。

「美咲」

「なに？」

そうしてようやく、僕は透明になれた。

(後書き)

お楽しみいただけましたか？

作中で主人公が「フラミンゴの体色は藻の色素」と言っていますが、これは厳密には誤りです。

藻に含まれるプランクトンが赤い色素をもっているんだそうで。

赤い色素を取り込んだから体が赤くなるなんて、考えてみれば不思議ですよ。

次回作も三題噺になるかもしれません。

ここまで読んでくださった皆さんに感謝しつつ、今回はここで筆をおきたいと思います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7357z/>

透明

2011年12月24日12時49分発行